

谷崎町印全集

第六卷

谷崎潤一郎全集 第六卷

定價一五〇〇圓

昭和四十二年四月十一日印刷
昭和四十二年四月二十五日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山 越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

小さな王國	一
魚の李太白	五
嘆きの門	五
柳湯の事件	一二
美食俱樂部	一三
母を戀ふる記	一九
蘇州紀行	二三
秦淮の夜	二四
呪はれた戯曲	二七
西湖の月	三九

富美子の足

三五五

眞夏の夜の戀

三九五

或る少年の恐れ

四〇九

或る漂泊者の倂

四七三

秋風

四八三

天鷲絨の夢

五〇三

小さな王国

大正七年八月號「中外」(原題「ちひさな王國」)

貝島昌吉がG縣のM市の小學校へ轉任したのは、今から二年ばかり前、ちやうど彼が三十六歳の時である。彼は純粹の江戸つ兒で、生れは淺草の聖天町であるが、舊幕時代の漢學者であつた父の遺傳を受けたものか、幼い頃から學問が好きであつた爲めに、とう／＼一生を過つてしまつた。——と、今ではさう思つてあきらめて居る。實際、なんぼ彼が世渡りの拙い男でも、學問で身を立てようなど／＼しなかつたら、——何處かの商店へ丁稚奉公に行つてせつせと働きでもして居たら、——今頃は一とかどの商人になつて居られたかも知れない。少くとも自分の一家を支へて、安樂に暮らして行くだけの事は出來たに違ひない。もと／＼、中學校へも上げて貰ふことが出來ないやうな貧しい家庭に育ちながら、學者にならうとしたのが大きな間違ひであつた。高等小學を卒業した時に、父親が奉公の口を搜して小僧になれと云つたのを、彼は飽く迄反對してお茶の水の尋常師範學校へ這入つた。さうして、二十の歳に卒業すると、直ぐに淺草區のC小學校の先生になつた。その時の月給はたしか十八圓であつた。當時の彼の考では、勿論いつまでも小學校の教師で甘んずる積りはなく、一方に自活の道を講じつゝ、一方では大いに獨學で勉強しようと思ふ氣であつた。彼が大好きな歴史學、——日本支那の東洋史を研究して、行く末は文學博士になつてやらうと云ふくらゐな抱負を持つて居た。ところが貝島が二十四の歳に父が亡くなつて、その後間もなく妻を娶つてから、だん／＼以前の抱負や意氣込みが消磨してしまつた。彼は第一に女房が可愛くてたまらなかつた。その時まで學問に夢中になつて、女の事なぞ振り向きもしなかつた彼は、新世帯の嬉しさ

がしみぐゝと感ぜられて來るに従ひ、多くの平凡人と同じやうに知らず識らず小成に安んずるやうになつた。そのうちには子供が生れる、月給も少しは殖えて來る、と云ふやうな譯で、彼はいつしか立身出世の志を全く失つたのである。

總領の娘が生れたのは、彼がC小學校から下谷區のH小學校へ轉じた折で、その時の月給は二十圓であつた。それから日本橋區のS小學校、赤坂區のT小學校と市内の各所へ轉勤して教鞭を執つて居た十五年の間に、彼の地位も追ひぐゝに高まつて、月俸四十五圓の訓導と云ふところまで漕ぎつけた。が、彼の收入よりも、彼の一家の生活費の方が遙かに急激な速力を以て増加する爲めに、年々彼の貧窮の度合は甚しくなる一方であつた。總領の娘が生れた翌々年に今度は長男の子が生れる。次から次へと都合六人の男や女の子が生れて、教師になつてから十七年目に、一家を擧げてG縣へ引き移る時分には、恰も七人目の赤ん坊が細君の腹の中にあつた。

東京に生ひ立つて、半生を東京に過して來た彼が、突然G縣へ引き移つたのは、大都會の生活難の壓迫に堪へ切れなくなつたからである。東京で彼が最後に勤めて居た所は、麴町區のF小學校であつた。其處は宮城の西の方の、華族の邸や高位高官の住宅の多い山の手の一廓にあつて、彼が教へて居る生徒たちは、大概中流以上に育つた上品な子供ばかりであつた。その子供たちの間に交つて、同じ小學校に通つて居る自分の娘や息子たちの、見すばらしい、哀れな姿を見るのが彼には可なり辛かつた。自分たち夫婦はどんなに尾羽打ち枯らしても、せめて子供には小ざつぱりとしたなりをさせてやりたかつた。何處其處のお嬢さんが着て居るやうな洋服が買つて欲しい。あのリボンが欲しい。あの靴が欲しい。夏になれば避暑に行

きたい。さう云つて子供にせがまされると、ひと不便さが増して來て、親としての腑がひなさがつく／＼と胸に沁みた。その上に又、彼は父親に死に後れた一人の老母をも養はなければならなかつた。律義で小心で情に脆い貝島は、其れ等の事を始終苦に病んで、家族の者に申譯がないやうな氣持にばかりなつて居た。で、いつそのこと暮らしの懸かる東京を引き拂つて、田舎の町に呑氣な生活を營んで見よう。さうして少しは家族の者を安穩にさせてやりたいと思つたのである。G縣のM市を擇んだのは、其處が細君の郷里である緣故から、幸ひにも轉任の口を世話してくれる人があつた爲めである。

M市は、東京から北の方へ三十里ほど離れた、生糸の生産地として名高い、人口四五萬ばかりの小さな都會であつた。廣い／＼關東の野が中央山脈の裾に打つかつて、次第に狭く縮まらうとして居るあたりの、平原の一端に位して居る町で、市街を取り卷く四方の郊外には見渡すかぎりの一面の桑畑があつた。空の青々と晴れた日には、I溫泉で有名なHの山や、その山容の雄大と莊嚴とで名を知られたAの山などが、打ち續く家並の麓の彼方に聳えて居るのが、往來の何處からでも眺められた。町の中にはT河の水を導いた堀割が、青く涼しく、さら／＼と流れて居て、I溫泉へ聯絡する電車の走つて居る大通りの景色は、田舎のわりには明るく賑やかで、何となく情趣に富んで居た。貝島が敗殘の一家を率ゐて、始めて其處へ移り住んだのは、或る年の五月の上旬で、その町を圍繞する自然の風物が、一年中で最も美しい、最も光り輝やかしい、初夏の日の一日であつた。長い間神田の猿樂町のむさくろしい裏長屋に住み馴れた一家の者は、重暗く息苦しい穴の奥から、急にカラリとした青空の下へ運び出されたやうな氣がして、ほつと欣びの溜息をついた。子供たちは、毎日城跡の公園の芝生の上や、T河の堤防のこんもりとした櫻の葉がくれ

や、満開の藤の花が房々と垂れ下つたA庭園の池の汀^{みぎは}などへ行つて、嬉々として遊んだ。貝島も、貝島の妻も、ことし六十いくつになる老母も、俄かに放たれたやうな氣樂さを覺えて、年に一遍、亡父の墓參に出かけるより外は、東京と云ふところを戀しいともなつかしいとも思ひはしなかつた。

彼が教職に就いたD小學校は、M市の北の町はづれにあつて、運動場の後ろの方には例の桑畑が波打つて居た。彼は日々、教室の窓から晴れやかな田園の景色を望み、遠く、紫色に霞んで居るA山の山の巒に見惚れながら、伸び／＼とした心持で生徒たちを教へて居た。赴任した年に受け持つたのが男子部の尋常三年級で、それが四年級になり、五年級に進むまで、足かけ三年の間、彼はずつと其の級を擔當して居た。麴町區のF小學校に見るやうな、キチンとした身^{なり}の上品な子供は居なかつたけれど、さすがに縣廳のある都會だけに、滿更の片田舎とは違つて、相當に物持ちの子弟も居れば頭腦の優れた少年もないではなかつた。中には又、東京の生徒に輪をかけて狡猾な、始末に負へない腕白なものも交つて居た。

土地の機業家でG銀行の重役をして居る鈴木某の息子と、S水力電氣株式會社の社長の中村某の息子と、此の二人が級中での秀才で、貝島が受け持つて居る三年間に、首席はいつも二人の内の孰れかゞ占めて居た。腕白な方ではK町の生藥屋^{きぐすりや}の俸^{きぐすりや}の西村と云ふのが隊長であつた。それからT町に住んで居る醫者の息子の有田と云ふのが、弱虫でお坊ちやんで、兩親に甘やかされて居るせるか、服裝なども一番贅澤なやうであつた。しかし性來子供が好きで、二十年近くも彼等の面倒を見て來た貝島は、いろ／＼の性癖を持つた少年の一人々々に興味を覺えて、誰彼の區別なく、平等に親切に世話を焼いた。場合に依れば随分厳しい體罰を與へたり、大聲で叱り飛ばしたりする事もあつたが、長い間の經驗で兒童の心理を呑み込んで居

る爲めに、生徒たちにも、教員仲間や父兄の方面にも、彼の評判は悪くはなかつた。正直で篤實で、老練な先生だと云ふ事になつて居た。

貝島がM市へ來てからちやうど二年目の春の話である。D小學校の四月の學期の變りめから、彼の受け持つて居る尋常五年級へ、新しく入學した一人の生徒があつた。顔の四角な、色の黒い、恐ろしく大きな巾着頭のところ／＼に白雲の出來て居る、憂鬱な眼つきをした、づんぐりと肩の圓い太つた少年で、名前を沼倉庄吉と云つた。何でも近頃M市の一廓に建てられた製糸工場へ、東京から流れ込んで來たらしい職工の悴で、裕福な家の子でない事は、卑しい顔だちや垢じみた服裝に據つても明かであつた。貝島は始めて其の子を引見した時に、此れはきつと成績のよくない、風儀の悪い子供だらうと、直覺的に感じたが、教場へつれて來て試して見ると、それ程學力も劣等ではないらしく、性質も思ひの外溫順で、むしろ無口なむつゝりとした落ち着いた少年であつた。

すると、或る日のことである。晝の休みに運動場をぶらつきながら、生徒たちの餘念もなく遊んで居る様子を眺めて居た貝島は、——此れは貝島の癖であつて、子供の性能や品行などを觀察するには、教場よりも運動場に於ける彼等の言動に注意すべきであると云ふのが、平素の彼の持論であつた。——今しも彼の受持ちの生徒等が、二た組に分れて戦争ごっこをして居るのを發見した。其れだけならば別に不思議でも何でもないが、その二た組の分れ方がいかにも奇妙なのである。全級で五十人ばかりの子供があるのに、甲の組は四十人ほどの人數から成り立ち、乙の組には僅かに十人ばかりしか附いてゐない。さうして甲組の大將は例の生藥屋の悴の西村であつて、二人の子供を馬にさせて、其の上へ跨りながら、頻りに味

方の軍勢を指揮して居る。乙の組の大將はと見ると、意外にも新入生の沼倉庄吉である。此れも同じく馬に跨つて、平生の無口に似合はず、眼を瞋らし聲を勵まして小勢の部下を叱咤しながら、自ら陣頭に立つて目にあまる敵の大軍の中へ突進して行く。全體沼倉は入學してからまだ十日にもならないのにいつの間にかこれほどの勢力を振ふやうになつたのだらう。貝島は其の時ふいと好奇心を唆られたので、兩頬に無邪氣な子供らしい微笑を浮べながら、さも面白さに釣り込まれたやうな顔つきをして、尙も熱心に合戦の模様を見守つて居た。と、多勢の西村組は忽ちのうちに沼倉組の小勢の爲めに追ひ捲くられて、滅茶々に隊伍を掻き亂された揚句、右往左往に逃げ惑つて居る。尤も沼倉組の方には、腕力の強い一騎當千の少年ばかりが集つては居るのだけれど、それにしても西村組の敗北のしかたは餘りに意氣地がなさ過ぎる。殊に彼等は、誰よりも沼倉一人を甚しく恐れて居るらしい。外の敵に對しては、衆を恃んで可なり勇敢に抵抗するのだが、一と度び沼倉が馬を進めて駆けて来るや否や、彼等は急に浮足立つて、ろく／＼戦ひもせずに逃げ出してしまふ。果ては大將の西村までが、沼倉に睨まれると一と縮みに縮み上つて、降参した上に生け捕りにされたりする。その癖沼倉は腕力を用ふるのでも何でもなく、たゞ縦横に敵陣を突破して、馬上から號令をかけ怒罵を浴せるだけなのである。

「よし、さあもう一遍戦をしよう。今度は己の方は七人でいゝや。七人ありや澤山だ」

こんな事を云つて、沼倉は味方の内から三人の勇士を敵に與へて、再び合戦を試みたが、相變らず西村組は散々に敗北する。三度目には七人を五人にまで減らした。それでも沼倉組は盛んに惡戦苦闘して、結局勝を制してしまつた。

その日から貝島は、沼倉と云ふ少年に特別の注意を拂ふやうになつた。けれども教場に居る時は別段普通の少年と變りがない。讀本を讀ませて見ても、算術をやらせて見ても、常に相當の出來榮えである。宿題なども怠けずに答案を拵へて来る。さうして始終黙々と机に凭つて、不機嫌さうに眉をしかめて居るばかりなので、貝島にはちよつと此の少年の性格を端倪することが出來なかつた。兎に角教師を馬鹿にしたり、惡戯を煽動したり、級中の風儀を紊したりするやうな、惡性の腕白者ではないらしく、同じ餓鬼大將にしても餘程毛色の違つた餓鬼大將であるらしかつた。

或る日の朝、修身の授業時間に、貝島が二宮尊徳の講話を聞かせることがあつた。いつも教壇に立つ時の彼は、極く打ち解けた、慈愛に富んだ態度を示して、やさしい聲で生徒に話しかけるのであるが、修身の時間に限つて特別に嚴格にすると云ふ風であつた。おまけにその時は、午前の第一時間でもあり、うららかな朝の日光が教室の窓ガラスからさし込んで、部屋の空氣がしーんと澄み渡つて居るせるか、生徒の氣分も爽やかに引き締まつて居るやうであつた。

「今日は二宮尊徳先生のお話をしますから、みんな靜肅にして聞かなければいけません」

かう貝島が云ひ渡して、嚴かな調子で語り始めた時、生徒たちは水を打つたやうに靜かにして、じつと耳を欽てゝ居た。隣りの席へ無駄話をしかけては、よく貝島に叱られるおしやべりの西村までが、今日は利口さうな目をパチクリやらせて、一心に先生の顔を仰ぎ視て居た。暫くの間は、諄々と説きだす貝島の話聲ばかりが、窓の向うの桑畑の方にまでも朗かに聞えて、五十人の少年が行儀よく並んで居る室内には、カタリとの物音も響かなかつた。

「——そこで二宮先生は何と云はれたか、どうすれば一旦傾きかけた服部の家運を挽回することが出来ると云はれたか、先生が服部の一族に向つて申し渡された訓戒と云ふのは、つまり節儉の二字でありました。——」

貝島も不斷よりは力の籠つた辯舌で、流暢に語り續けて居ると、その時までひっそりとして居た教場の隅の方で、誰かゞひそ／＼と無駄話をして居るのが、微かに貝島の耳に觸つた。貝島はちよいと厭な顔をした。折角みんなが氣を揃へて靜肅を保つて居るのに、——全く、今日は珍しい程生徒の氣分が緊張して居る様子だのに、誰が餘計なおしやべりをして居るのだらう。さう思つて、貝島はわざと大きな咳拂ひをして、聲のする方をチラリと睨みつけながら、再び講話を進めて行つた。が、ほんの一二分間沈黙したかと思ふと、又しても話聲はこそ／＼と聞えて来る。それがちやうど、齒の痛みか何かのやうに、チクチクと貝島の神経を苛立たせるので、彼は内々癩癩を起しながら、話聲が聞える度びに急いで其の方を振り向くと、途端にバツタリと止んでしまつて、誰がしやべつて居るのだかは容易に分らなかつた。けれども其れは、教室の右の隅の方の、沼倉の机の近所から聞えて来るらしく、しやべつて居る者はたしかに沼倉に違ひないと推量されて來た。若しも其の者が沼倉以外の生徒であつたならば、殊にいたづら者の西村などであつたならば、貝島は直ぐにも向き直つて叱りつける所だけれど、なぜか彼には沼倉と云ふ子供が叱りにくいやうな氣がした。何だか斯う、子供で居て子供でないやうな、煙つたい人間のやうに感ぜられて、叱るのが氣の毒でもあれば不躒でもあるかの如く思はれたのであつた。一つにはまだ馴染みの薄い爲めでもあるが、彼は今日まで沼倉に對して、教室での質問以外に、親しみ深い言葉を交へた事は一度もなかつた。

で、成るべくならば叱らずに済ませよう、そのうちには黙るだらう、と、出来るだけ貝島は知らない風を装つて居ると、反對に話聲はだん／＼無遠慮に高まつて來て、遂には沼倉の口を動かす様子までが、彼の眼に付くやうになつた。

「誰だ先からべちや／＼としやべつて居るのは？ 誰だ？」

と、とう／＼彼は我慢がし切れなくなつて、かう云ひながら籐の鞭でびしツと机の板を叩いた。

「沼倉！ お前だらう先からしやべつて居たのは？ え？ お前だらう？」

「いゝえ、僕ではありません。……」

沼倉は臆する色もなく立ち上つて、かう答へながらずつと自分の周囲を見廻した後、

「先から話をして居たのは此の人です」

と、いきなり自分の左隣に腰かけて居る野田と云ふ少年を指さした。

「いゝや、先生はお前のしやべつて居る所をちゃんと見て居たのです。お前は野田と話をして居たのではない。お前の右に居る鶴崎と二人でしやべつて居たのだ。なぜさう云ふ謊をつくのですか」

貝島は例になくムカムカと腹を立て、顔色を變へた。なぜかと云ふのに、沼倉が自分の罪をなすりつけようとした野田と云ふ少年は、平生から溫厚な品行の正しい生徒なのである。野田は沼倉に指さされた瞬間、はつと驚いたやうな眼瞬きをして、憐れみを乞ふが如くに相手の眼の色を恐る／＼窺つて居たが、やがて何事かを決心したやうに、眞青な顔をして立ち上ると、

「先生沼倉さんではありません。僕が話をして居たのです」

と、聲をふるはせて云つた。多勢の生徒は嘲けるやうな眼つきをして一度に野田の方を振り返つた。

それが貝島にはいよ／＼腹立たしかつた。野田はめつたに教場の中で無駄口をきくやうな子供ではない。

彼は大方、此の頃級中の餓鬼大將として威張つて居る沼倉から、不意に無實の罪を着せられて、據ん所なく身代りに立つたのだらう。若しも罪を背負はなかつたら、後で必ず沼倉にいぢめられるのだらう。さうだとすれば沼倉は尙更憎むべき少年である。十分に彼を詰問して、懲らしめた上でなければ、此のまゝ赦す譯には行かない。

「先生は今、沼倉に尋ねて居るのです。外の者はみんな黙つておいでなさい」

貝島はもう一遍びしりツと鞭をはたいた。

「沼倉、お前はなぜさう云ふ謔をつくののです。先生はたしかにお前のしやべつて居る所を見たから云ふのです。自分が悪いと思つたら、正直に白狀して、自分の罪をあやまりさへすれば、先生は決して深く叱言を云ふではありません。それだのにお前は、謔をつくばかりか、却つて自分の罪を他人になすり付けようとする。さう云ふ行ひは何よりも一番悪い。さう云ふ性質を改めないと、お前は大きくなつてからロクな人間にはならないぞ」

さう云はれても、沼倉はビクともせず、例の沈鬱な瞳を据ゑて、上眼づかひに貝島の顔をじろ／＼と睨み返して居る。その表情には、多くの不良少年に見るやうな、意地の悪い、膽の太い、犢犢な相が浮かんで居た。

「なぜお前は黙つて居るのか。先生の今云つたことが分らないのか」